

資格とっ太郎からのお年玉

# 勉強の本質

製作：資格とっ太郎

## はじめに

こんにちは、資格とっ太郎です。  
いよいよ 2014 年がスタートしました。

僕のサイトやブログやメルマガを読んでいるあなたにとって、この 2014 年が今までにないほどの実りのある年になるよう、心からの願いを込めてこのレポートを書くことにしました。

このレポートは、そんな僕からあなたへのお年玉です。

ぜひ最後まで（できれば印刷して）ご覧になって、今年 1 年を実りある最高の年にするために頑張っていきましょう！

このレポートの内容は、タイトルにもある通り“勉強の本質”というとてもシンプルな内容です。

いま世間では、速読や、聞き流すだけ、といったあらゆる勉強法なるものが流行しているようです。

そして、そういうような表面的なテクニック論はわかりやすいしお手軽、というだけで人気に火がつきます。

しかし、僕の経験上、本当に大事なものはそんな表面的なテクニックでも、聞き流すだけで簡単に理解できる手軽さでもありません。

大事なものは“本質”です。

残念ながら、“本質”というもののほど世間からのウケは悪く、本当に実力のある一部の人にしか見向きもされないものはないでしょう。

だから、たとえ本にして出版したとしても売れることはなく、ただ赤字を抱えて、そのうち本屋で目にすることすらなくなってしまうのです。

しかし、あえて断言します。

大事なものはテクニックではなく“本質”です。

後にもお伝えさせていただきますが、僕が他の誰よりも短時間で効率的に資格試験に合格できるのは、この“本質”を誰よりも理解しているからです。そして実践しているからです。

普通の人が 1000 時間かけても合格できない難関資格に、たったの 170 時間で合格できたのも、全ては“本質”がなせる業です。

そして、僕は何も特別なことをしているわけではありません。

勉強の本質とは、非常にシンプルなのです。

シンプルすぎて、今この場でも一言で表すことができます。

勉強の本質、それは、

“勉強とは楽しいものである”

勉強の本質はこれだけ。誰にでも理解できるたったの 12 文字の情報です。

この情報を理解するのは簡単です。小学生でも理解できます。

しかし、本当の意味で自分の中で咀嚼（そしゃく）し、実践に移すことをほとんどの人ができません。

このレポートは、その本質を“実感してもらうための”1つのストーリーになっています。

僕自身が、勉強の本質に気づいて実践するまでのストーリーです。

舞台は、僕の中学～高校生時代にまでさかのぼります。

今現在 25 歳なので、およそ 10 年ほどさかのぼることになりますが、今の僕を支えている重要な事柄がその時代に隠されています。

これは僕自身のストーリーです。

僕自身のストーリーですが、勉強の本質は“勉強は楽しいものである”というその事実が変わりありません。

僕がその本質に気づき、まさに人生の転機となった物語を（何かと忙しいこのご時世ですので）手短かにまとめた作品です。

自分の過去をさらすのは少し恥ずかしい気もしますが、このレポートを読んだあなたが、勉強の本質に気づき、実践するための一つの「参考」となれば嬉しい限りです。

## 何よりも勉強が嫌いだった

「あんた試験前なんだから勉強しなさい！」

また始まった。。。もう聞きあきたよ。。。。

中学に入ってからというもの、試験前になるとすぐにウチではオカンの怒号が飛んできます。ウチのオカンは、いつもテストの結果に口うるさいのです。

「どこの〇〇ちゃんは、中間テストで1位だった。」

「どこの△△くんは、理科のテストで100点だった。」

だからどうした。僕はそれを聞かされてどうしろというのだ？

あ～はいはい、勉強しろってことね。。。。

ウチのオカンは、毎度あの手この手を使って僕に勉強させようとしてきます。

いや、正確には少しでも試験で良い順位を取らせようとしているのです。

僕は勉強がキライだ。

なんにも楽しくない。ただ教科書を読まされて、先生の配ったプリントの問題をやらされ、試験前になるとなんの役に立つかもわからないことを覚えさせられて。。。。

中学生の頃の僕は、周りの友達や、多分ほとんどの中学生と同様、勉強が大嫌いでした。そして、その大嫌いな勉強が中学を卒業しても、高校・大学とあと7年間も続くかもしれないことに絶望すら感じていました。

高校すらも行きたくない。

なんでお金を払ってまで、大嫌いな勉強をしなくてはならないんだ。義務教育は中学までなのに、なんで高校にまで行かなきゃいけないんだ。

「高校には行きたくない」

そう両親へ話したこともありました。  
そして当然のことながら猛烈に反対されたことは、普通の日本の家庭で育った人には想像に難くないことでしょう。

仕方なく、僕は高校だけはガマンすることにしました。  
高校だけはガマンして、卒業したら就職して働くことを中学生ながらに、そう心に決めたのです。

幸い、僕の兄が同じように高卒で就職していたので、両親もそれには渋々でしたが納得してくれました。

そして僕は、地元でも就職率の高い工業高校へ進学することになったのです。  
学科は電気科。元々、電気には多少の興味を持っていましたし、就職率も 100%と安定している学科だったので迷わずそこへ決めました。

## 相変わらず勉強は嫌いだった

高校に入ったからといって、当然のことながら僕の勉強嫌いが治ることはありませんでした。

中学の頃と何も変わらない。  
ただ授業を受けて、寝たら怒られて、宿題をさせられ、授業中に黒板の文字を写しただけのノートを提出させられ。。

勉強する内容が変わっただけで、やっていることは何一つ変わりませんでした。  
勉強嫌いが治るはずありません。

そして、入学して間もなくの事、はじめての試験が始まりました。

毎度のことですが、ウチのオカンも口うるさく「勉強しろ」と言うことを忘れてはいません。

相変わらずの勉強嫌いなので、試験前といっても中学の時と同様、勉強しているようなしていないような、テキトーな感じでした。

しかし、中学とは一つだけ違うことがありました。

「せっかく電気科に入ったんだから、電気の勉強だけは真剣に取り組もう」

今思えば、この時が僕（資格とっ太郎）の、人生のターニングポイントだったのかもしれない。

## 転機

電気だけは真剣にやる、そうやって取り組んだ高校生活はじめての試験だったのですが、ここで一つのキセキが起きました。

試験結果。

電気以外の科目は、今までと同様、平均点そこそこの何の特徴もない点数だったのですが、電気だけは満点近い点数だったのです。

「電気の科目だけ真剣にやったのだから当たり前の結果じゃないか」

確かにそうです。これだけ見ると、キセキでも何でもなく、ただちゃんと勉強した科目で良い点数が取れた。ただそれだけの事です。

しかし、キセキが“起き始めた”のこの時からです。

試験が終わった後も、電気だけはちゃんと勉強しました。

電気だけは授業も真面目に聞き、電気だけは予習も復習もして、電気だけはこの学校の誰よりも勉強しよう。そう取り組んだのです。

すると、不思議な出来事が僕の身に起きました。

次の試験の時、電気の科目は必然的に満点近い点数を取れたのですが、不思議なことに“他の科目の点数もかなり上がっていた”のです。

もちろん、単にテストが簡単になって平均点ごと上がったのではなく、平均点は前回とほぼ変わらないまま、僕の点数だけが上がっていたのです。

僕はビックリしました。

その時のテストの総合点はクラスでも1位を取るほどの高得点。

周りのみんなはオカンも含め、ビックリしていましたが、一番ビックリしたのは僕自身です。

勉強嫌いの僕が、偏差値平凡な学校とはいえ1位をとるなんて夢にも思わなかったことです。中学の時、いつも僕より成績が上だった中学からの同級生にも圧倒的な大差がついていました。

まさにキセキです。

しかもこのキセキは一度きりではありません。  
高校生活3年間、ほぼすべての試験で、1位を取り続けたのです。

しかし僕は特別なことは何もしていません。  
ただ「電気だけ」を徹底的に勉強した。それだけです。

この時から僕の勉強に対する“想い”に変化がありました。

相変わらず、学校の勉強は嫌いで嫌いで仕方なかったのですが、電気だけは好きになりました。

元々興味があったこともありますが、それ以上に「授業以外で」勉強することが増えたのが原因だと思います。

実験と称して電池を大量に購入してモーターを爆発させてみたり、修理と称して家の壊れた電気用品を分解してみたり、いろんなことを興味本位でやりました。

それこそ最初の内は何も分からず、壊れた電気用品に追い打ちをかけるようなことしかできなかったし、そもそも実験ではモーターを爆発させるつもりなん



てなかったのに、なぜか爆発したのです。

しかし、勉強していくうちに、少しずつ電気の構造がわかりだして、ホントに壊れたものの故障個所を見つけて修理できるようになったり、電気工事の資格を取って自分の家の電気工事をしてみたりと、いろんなことができるようになっていったのです。

楽しくないはずがありません。

もちろん、成功の数以上に失敗はしているけれど、無茶しすぎて家のブレーカーを落とした事は何回もあるけれど、それでもなんで失敗したのか？なにがダメだったのか？自然と疑問がわいてきて、自然と勉強しようという気持ちになったのです。

今の僕（資格とっ太郎）の原点は、まさにここにあると思います。

何かに疑問を感じ、それを突き詰めるために“自然に”勉強し、解決してはまた新しい疑問が出てきて、また勉強し・・・

僕の勉強はいつも「なんで？」という好奇心から始まります。そういう意味では僕の心は、未だに子どもなのかもしれません。普通の人たちがなんにも思わないことに疑問を持ち、その答えを見つけるために勉強をする。まさに子どもながらの好奇心です。

「なんで電気は流れるのだろう？」  
「なんで冷蔵庫は冷えるのだろう？」  
「なんで扇風機は回るのだろう？」  
「なんで僕は生きているのだろう？」  
「なんで世界は平和にならないのだろう？」  
「なんで僕はサラリーマンなのだろう？」  
「なんで筋トレをすると筋肉がつくのだろう？」  
「なんで子どもは可愛いのだろう？」

なんで？なんで？なんで？

僕の勉強の始まりは、いつもその「なんで？」から始まります。

“だから勉強は楽しいのです。”

「なんで？」から始まらない勉強はいつも苦痛でしかありませんでした。誰かに勉強することを押しつけられた中学の頃もそうでしたし、高校時代の電気以外の科目もそうです。

つまらない勉強が身に着くはずありません。

たった一つでいいのです。

たった一つでいいから、「なんで？」と思える、興味を持てることを「徹底的に」やればいい。

そうすれば勉強の楽しさがわかるし、物事の本質を見極める“目”を養うことができます。

だから僕は、大して勉強していたわけでもない、他の科目でも高得点を取ることができたのです。

本質を見極める目を養うだけで、他のクラスメイトが必死に勉強しているのを尻目に、試験の前日にちょっとだけ勉強すれば高得点が取れる。

本質を見極めるというのは、それだけ大事なことですし、自分の能力を直接決めることにもなる重要な“スキル”です。

そして、それを身につける方法は一つしかありません。

なにか一つでもいいから、自分が「なんで？」と思える、興味のあることを「徹底的に」突き詰めることです。

徹底的に突き詰める、その方法はあなたの自由です。

誰の指示を受ける必要もないし、誰に邪魔されることもありません。全ては“あなたの意思で”、“あなたのやり方で”やればいいのです。

それこそが『勉強』です。

僕は今でも、もちろん勉強を欠かすことはありません。  
疑問が尽きることがないということもありますし、何より“勉強が楽しい”からです。

## さいごに

勉強の本質さえ理解して実践すれば、資格を取ることもなんていたって簡単なことです。

表面的なテクニックだけなら、市販の本でも買って読めばいくらでも知ることができますが、残念ながらそんなことをしても本質を理解することはいつまでたっても叶いません。

本質は実践とともにしか理解できないからです。

勉強とは本来楽しいものです。しかし、それを実感できるようになるのは、あなたが実践して経験することでしか得られません。

僕は僕自身の処女作である『独学マスター』という教材を今度発売することになります。勉強とは本来広い意味で独学なのです。

自分の意思で、自分の判断で、自分のやり方でやるのだから独学以外の何物でもありません。

そういう意味で、僕は「独学は誰もがマスターすべきものである」と考えています。

そして僕はそれを、僕のサイトやブログやメルマガを読んでいるあなたを含め、多くの努力する人たちに理解してもらいたいという想いをこめて、『独学マスター』という教材を製作しました。

独学をマスターすることはもちろん経済的です。

普通の人が 1000 時間かけてやっと合格できる合格率一桁%の難関資格ですら、独学をマスターしていればたったの 170 時間で合格できます。これは僕自身の経験です。

独学をマスターすれば、時間もお金も節約できます。

しかし、もっと重要なのは、独学をマスターすることで (=勉強の楽しさを実感することで)、自らの人生をより実りのあるものにすることができるということです。

僕はこれまで、自分のために勉強を楽しみ、自分のために自分の人生をよりよい方向へ変えていこうと努力してきました。そして変わってきました。

しかしこの 2014 年からは、僕だけじゃない、周りの人たち (=仲間) のために、勉強の楽しさを伝えていこうと思っています。

その走りが『独学マスター』です。

この教材を手に入れるかどうかはあなた自身の自由ですが、これだけは覚えておいてください。

このレポートを最後まで読んでくれたあなたは、もう僕の仲間です。

僕に興味を持ってくれて、自分の人生を良くしていこうと努力しているあなたは僕にとっては仲間なのです。

僕はその仲間を「勉強」という形で応援できればと思っています。

さいごになりますが、あなたにとって 2014 年が飛躍の年になるよう、心より応援しております。そして、今年も一年、よろしく願いいたします。

—資格とっ太郎—